

親切のバトン

大分県 山香中学校 3年 尾崎 埜亜

私には、宮崎県に住む祖父、祖母がいます。私が生まれた時からいっしょにいてくれたので二人目のお父さんお母さんのような存在です。

祖父、祖母は70歳近くになります。祖母は、仕事をしていて元気なのですが、祖父は3年ほど前に退職し、農業をしています。たまに宮崎に帰ると、

「足、腰、肩が痛い。」

と言います。私は、

「大丈夫。」

と声をかけますが、行動に移すことはできませんでした。私は、なぜ行動に移せないのかと自分自身にイライラしていました。それで、中学生になって思い切って手伝おうとしました。すると、

「大丈夫かい。家でゆっくりしときよ。」

と言われました。「きつい」と言っているのに、なぜこんなことを言うのだろうと、私は不思議な気がすると同時に、祖父に対してちょっと腹立たしくもなりました。でも、やはり、何かして助けたい、祖父を、楽にしてあげたいという気持ちを捨てきれず、私は畑に出ました。祖父の働く姿を見ていたら、昔からそうやって私たちのために働いてくれていたことを思い出しました。

私は、それだけ、祖父、祖母に助けられてきたんだなあと思います。だからこそ今度は私が恩返しをしなければなりません。私は今、宮崎に帰ったときは、恩返しをするだけでなく、感謝の気持ちをもって手伝いをします。手伝いは、牛の世話、畑の野菜取りなどです。やさしい祖父のために全力をつくして手伝いをすると、温かい笑顔で、

「ありがとう。助かったよ。」

と言ってくれるので、きつさも忘れ、うれしい気持ちになります。まだまだ手伝いをしたくなりますが、大分県にいるのであまり帰れず、心配です。でも帰ったときは、自分のできること、小さいことをやっていきたいです。

人に親切をするということは、私にはまだできないことだと思っていました。でも、親切は、一つひとつのことを積み上げるとよいものになることがわかりました。親切な心は自分にとって、相手にとって大事なもの、必ず持っているものだと思います。親切をできるとき、できないときがありますが、できるときにいっぱいすることが大切だと思います。人が始めれば、相手も次の人に親切バトンをつないでくれると思います。こうなれば、親切の輪が世界中に広がって、たくさんの人が笑顔になります。

私は将来、保育士になりたいと思っています。そして、子どもたちに親切のバトンをつないでいきたいと思っています。